



筑紫 哲也
ジャーナリスト



アグネス・チャン
歌手・エッセイスト

山口 仙二
被爆者



吉永 小百合
女優

私たちは 「アンゼラスの鐘」製作を支援します

民青同盟名古屋北西地区委員会による
名古屋での初めての一般上映となります。
ぜひご賢下さい。

響き渡ることを信じて ふたたびアンゼラスの鐘が

Story

美しいアンゼラスの鐘の音が時を告げる浦上天主堂から、北東へおよそ1キロ。小高い丘の上に建つ浦上第一病院は、元はカソリックの神学校でした。そのため礼拝や告白など宗教活動の場を併せ持ち、戦時下で疲労した市民にとって、心身共に頼りとなる存在でした。

病院に迎えられたたった一人の医師、秋月辰一郎は仏教徒でしたが、その誠実で飾らぬ人柄はカソリックの信者たちの敬愛を得ていきます。

広島に投下された新型爆弾の威力が秋月らにも伝わり、思わしくない戦況を人々が案じ始めている時、B29 重爆撃機が密かに近づいていました。長崎上空に新型爆弾が投下され炸裂するやいなや、一瞬にして町とそこで生活していたあまたの人々を焼き尽くします。浦上天主堂は無惨に破壊され、炎上し、美しい鐘を響かせていたアンゼラスの鐘は吹き飛ばされ、瓦礫の中に埋もれました。

幸いにも生き残った秋月と浦上第一病院の人々は、互いに助け合い、患者までも一体となって焼け焦げた病院跡で医療救護活動に立ち上がります。しかし、その手に残されたものは粗末な器具と赤チンなどわずかな医薬品のみ。焼け爛れた無数の人々の惨状と被害の甚大さに、秋月たちは時として立ちすくみ、無力感に襲われます。

「日本人は、戦争の本当の悲惨さを知らなかった」――

死を宣告された町、長崎を人々は恐れます。しかし秋月は仲間たちと共にどどまり、懸命に活動を続けます。ふたたびアンゼラスの鐘が長崎の空に響き渡る、「復活」のときを信じて…

